

何故日本語は曖昧だと思われるのか

—格助詞からの一考察—

Why Is It Thought Japanese Is Vague? -An Examination Of Japanese Case Particles-

周国龍*

Guo Long ZHOU

要 旨

日本語の格助詞は同じ表現において置き換えのできる場合とできない場合がある。本稿は、主に置き換えのできる場合において、置き換えにより表現の意味はどれほど変わったかによって三種類に分け、これを手掛かりに中国語を母語とする日本語学習者は何故日本語を曖昧と思うのか、その原因について考察した。

日本語の格助詞間の意味の微妙な違いは話の内容を正確に伝える役目をしているが、学習者は格助詞間の意味の微妙な違いに対する理解不足により誤解と誤用を犯しがちになる。これが日本語は曖昧だと思わせる一因ではないかと考えられる。

キーワード：格助詞 置き換え 意味 人間関係 曖昧

はじめに

中国語を母語とする日本語学習者（以下学習者とする）はよく日本語は曖昧だと言う。日本語は本当に曖昧な言語なのだろうか。もし日本語が本当に曖昧な言語であるならば日本語母語話者の間における日常のコミュニケーションにも支障が起きるはずであるが、そういった話はあまり聞かれない。この事実を考えると、曖昧だと思われたのは日本語自身に起因する問題ではなく、学習者の日本語に対する理解不足に起因しているのではなかろうか。しかし、何故日本語は曖昧だと思われるのか、に関しては未だに詳しく解明されて

*本学教授、対照言語学 (Contrastive Linguistics)

いないのが実情のようである。本稿は日本語の文法に対する理解にもその原因があると考え、まず文法の一部である格助詞を中心に考察し、曖昧と思われる一因を探ってみる。

日本語の文法には格助詞がある。表現において格助詞は体言と体言、体言と用言との格関係といった文法的な関係を示し、その文法的な意味を表す。格助詞が示す文法的な関係と文法的な意味は表現の意味に大きく影響する。日本語では同じ主語、述語と目的語で構成される表現（以下同じ表現とする）でも格助詞が置き換えられることによって表現の意味が変わるが表現としては成立する。これは表現の事柄の内容に関する意味の変化にとどまる場合もあれば、それだけではなくそれと同時に表現に託された考え方や感情といった気持ちの微妙な変化を伝達する役割を果たす場合もある。後者は格助詞の使い方次第で人間関係に影響を与える可能性は十分考えられる。

中国語の文法には日本語のような格助詞という文法事項は存在しないため、学習者にとっては格助詞の文法的な関係や文法的な意味は容易に理解できるような文法事項とはいえない。その上に異なった格助詞の置き換えにより表現の事柄の内容に関する意味の変化や表現に託された微妙な気持ちの違いを理解するには尚更困難になる。日本語の格助詞間の意味の違いが正確に理解でき、正しく使い分けることができなければ、当然のことながら誤解と誤用が生じる。日本語は曖昧だと思われる原因は色々あろうが、そのうちの一つは格助詞の誤解と誤用といった使い方の理解不足に起因しているのではないかと思われる。

以下、何故日本語は曖昧だと思われるのかその原因を明らかにするために、まず同じ表現において格助詞の置き換えが可能の場合と不可能の場合に分ける。そして置き換えが可能な場合、異なった格助詞の使用により事柄の内容に関する意味はそれほど大きな違いのない表現、事柄の内容に関する意味が変わった表現、事柄の内容に関する意味が変わるにとどまらず人間関係にまで影響する表現に分け、これらを中心に考察していく。

1. 格助詞の置き換えに関する使用制約について

同じ表現において格助詞だけの置き換えはできる場合とできない場合がある。置き換えができないのは表現全体の表す意味と格助詞の文法的な意味との共起性がないため、表現の意味によって格助詞の使用は制約を受けるからである。表現の意味による制約は表現の用言である動詞の意味によるのと体言である名詞の意味によるのことがある。置き換えが可能な場合を詳しく考察する前に、まずどのような場合において置き換えができないのかを見ておく必要がある。これにより同じ表現で他の格助詞と置き換えることができる場合、表現の意味の変化は主に格助詞の置き換えによって生じるということが分かるからである。

(1) 動詞の意味による制約

動詞の意味によっては格助詞が制約を受け使用できる格助詞は限られる場合がある。

例 1：太郎は花子と結婚しました。(注1)

例 2：太郎は花子に花をあげました。

例 3：太郎は大学を卒業しました。

例 4：太郎は教室で本を読んでいます。

例 1 の「結婚する」は双方共同の意志による動詞で、一方的な意志では成立できない行為とされているため、格助詞も必ず双方共同の行為という文法的な意味を有する「と」で表さなければならない。これは「恋をする」といった双方共同の意志による行為でも、一方的な意志による行為でも可能な表現を見ればわかる。

例 5：太郎は花子と恋をしています。

例 6：太郎は花子に恋をしています。

例 5 のように双方の意志で「恋をする」ことであれば「と」もできるし、例 6 のように一方的に片思いをするのであれば「に」もできる。意味が大きく異なるが格助詞「と」、「に」の置き換えが可能となるわけである。しかし例 1 の「結婚する」は一方的な意志による行為では成立できず必ず双方の意志による行為でなければ成立できない動詞だから、「と」しかできないわけである。例 2 の「あげる」は必ず行為の着点の相手という意味を表す「に」と行為の対象という意味を表す「を」が不可欠となる。例 3 の「卒業する」は抽象的な場所の離脱の意味を有する「を」を用いて表さなければならない、例 4 の「本を読む」行為が行われる場所を表す「で」で表さなければならない。

このように、同じ表現において格助詞の使用は動詞の意味による制限を受け、他の格助詞との置き換えはできない場合がある。

(2) 名詞の意味による制約

名詞の意味によっては格助詞が制約を受け使用できる格助詞は限られる場合がある。

例 7：階段を上がる。

例 8：二階に上がる。

例 9：黒板に字を書く。

例 10：筆で手紙を書く。

例 11：玄関を入る。

例 12：部屋に入る。

例 7 の「階段」は通常移動の場所としては用いられるが、移動の着点としては考えられにくい。そのため、着点という文法的な意味を有する「に」は使えず、移動の場所を表す「を」を用いなければならないわけである。一方、例 8 の「二階」は移動の場所としてではなく、移動の着点の意味にしか考えられないので、移動の場所を意味する「を」は使え

ず、「に」を用いて移動の着点を表さなければならない。例9の「黒板」は「書く」行為の着点を表すことはできるが、道具としても行為の行われる場所としても常識的に考えられないので、「で」は用いられず、行為の着点を表す「に」になるわけである。また、例10の「筆」は手紙を「書く」道具として認識されるのが普通であろうから、道具を表す「で」を用いることになる。例11の「玄関」は通過する空間としては可能だが、移動の着点としての可能性はまずないと言ってよかろう。だから移動の通過点を表す「を」になる。一方、例12の「部屋」は通過点とは通常考えられず、移動の着点を表す「に」を使わなければならないわけである。

このように、名詞の意味により用いられる格助詞は制約を受け、同じ表現において使用できる格助詞が限られてしまうのである。

(3) 格助詞に関する制約について

このように、動詞あるいは名詞の意味の制約をうけて使用される格助詞も自ずと決まるのだから、同じ表現における格助詞の置き換えにより表現の意味に変化が起きる可能性もないわけである。そのため、置き換えのできる表現における格助詞間の文法的な意味の違いと置き換えによる表現の意味の変化に対する理解と使用と比べれば、学習者にとっては比較的習得しやすい文法事項であると言える。またこのような表現で、格助詞に対する誤解あるいは誤用が起きたとしても文法的な間違いに止まり、表現の理解に支障は生じるであろうが、人間関係に影響を及ぼすほどの問題が起きるという可能性は低いであろう。当然このような格助詞の使い方の難しさと煩わしさを感じることもあったとしても日本語は曖昧だと思わせるようなことはないと思われる。従って、日本語の曖昧さの原因を究明するにあたって、ここにこのような制約を受け置き換えのできない格助詞もあることを指摘するにとどめ、この類の表現についてはこれ以上細かく論じないこととする。

2. 格助詞の置き換えができる表現の分類について

前章で同じ表現において置き換えのできない格助詞の制約について見てきた。これは主に格助詞の文法的な意味と体言である名詞、あるいは用言である動詞との意味上の共起関係による制約である。その一方、同じ表現において異なった格助詞で置き換えても表現として成り立つ場合もある。これは異なった格助詞のそれぞれの文法的な意味は表現全体で表される意味との共起関係が成り立つからである。異なった格助詞が用いられれば、当然のことながら大なり小なり表現の意味に変化が起きる。意味の変化のパターンを大きく三種類に分けることができる。

- 一. 異なった格助詞の使用で、事柄の内容に関する意味の質的な変化は見られない。

例 13：醤油は大豆でできる。

例 14：醤油は大豆からできる。

格助詞「で」と「から」の文法的な意味^(注2)がもたらす微妙なニュアンスの違いは確かにあろうが、「醤油は大豆より作られる」といった事柄の内容に関する意味に変化は見られない。このような場合、格助詞間の文法的な意味の違いに対する理解が不十分だとしても、事柄の内容に関する基本的な意味さえ理解できれば、表現の理解に大きな支障を生じるようなことは考えにくい。

二. 異なった格助詞の使用により、事柄の内容に関する意味が質的に異なってくる。その違いを正確に理解できなければ表現の意味に対する誤解と誤用が起きてしまう。

例 15：本を三時まで読んだ。

例 16：本を三時までに読んだ。

「読書する」行為を終了する意味と「読了する」意味とでは当然事柄の内容に関する意味において質的に異なる。一と比べれば事柄の内容に関する意味の質的な変化の有無という点においてはかなり異なるわけであるが、次の三の話し手の気持ちまで変化が見られるのと比べればまだ事柄の内容の意味に関する変化というレベルに止まっていると言えよう。

三. 異なった格助詞の使用により事柄の内容に関する意味はどれだけ異なってくるかはともかく、その表現に託された考え方や感情といった気持ちの変化は表現から見てとれる。

例 17：お茶がいいです。

例 18：お茶でいいです。

もてなす人から聞かれたら、例 17 例 18 のどちらでも返事することができる。しかし、事柄の内容と同時に伝達される気持ちには大きな差異がみられる。このような場合において話し手の気持ちの表し方次第で人間関係に影響を与える可能性が高いと考えられる。

以上のように、格助詞の置き換えにより、一のように事柄の内容に関する意味に質的な大きな差異は見られない場合もあれば、二のように事柄の内容に関する意味の質的な変化に止まる表現もある。また三のように事柄の内容に関する意味の差異はともかく、それに付随する話し手の気持ちまで大きく異なる表現もある。事柄の内容に関する意味の変化に止まる表現の誤解と誤用は主に事柄の内容に関する意味の理解の範囲内に収まるであろうが、気持ちの変化も含まれる表現の誤解と誤用は人間関係にも大きく影響する可能性が高いと思われる。以下、これらについてそれぞれ分析していく。

3. 質的な変化が見られない場合

本章で同じ表現において格助詞の置き換えはできるが、置き換えても事柄の内容に関する

る意味に質的な変化が見られない場合がある。これらについて考えてみる。

例 13：醤油は大豆でできる。

例 14：醤油は大豆からできる。

例 13 例 14 では、「醤油は大豆によって作られる」という意味さえ理解できたら、事柄の内容に関する意味は理解されたことになり、「で」と「から」の違いを正しく理解できないからといって大きな誤解はまず起らないであろう。

例 19：会議は3時から始まる。

例 20：会議は3時に始まる。

例 19 の「3時に」にしても、例 20 の「3時から」にしても、会議の開始時間は3時だという基本的な意味に変化は見られないので、「に」と「から」のニュアンスの違いを正しく理解できずに開会の時間を間違えるような事態は起きないであろう。従って意味の伝達に支障をもたらすことはまずないと言えよう。

例 21：会議は3時に始まりますから、委員は3時5分前に会議室にお集まりください。

例 22：会議は3時に始まりますから、委員は3時5分前までに会議室にお集まりください。

「3時5分前に」だから、出席者は時間通りに5分前に入場したとしても、「3時5分前までに」と言われたから、少々早めに入場したとしても、会議の出席者は「3時5分前」までに会議室に入ってさえいれば、3時から始まる会議に何の支障ももたらされないはずである。従って「に」と「までに」に対する違いへの理解が十分できないことにより会議に混乱をもたらすことはまず考えられない。

このように、格助詞間に文法的な意味の違いはあるが、事柄の内容の意味に大きな変化を与えることは考えられない。だから、格助詞間のこのような違い、そしてこれによる表現の意味の微妙な違いを正しく理解できないとしても、意味の伝達に大きな支障をもたらすことはないと考えてよい。

4. 質的な変化は見られる場合

格助詞間の文法的な意味の微妙な違いにより事柄の内容の意味に変化をもたらす場合もある。このような場合、格助詞間の文法的な意味の微妙な違いを理解できなければ事柄の内容に関する意味を誤解し、表現の理解に支障をきたす恐れがあるため、格助詞間の文法的な意味の微妙な違いを見過ごすことはできない。次はこれらについて見ていく。

例 23：田中さんは就職のことについて先生に話した。

例 24：田中さんは就職のことについて先生と話した。

例 23 の「に」では主に田中さんが先生に一方的に就職のことを報告したことになるが、

「と」になると「報告する」よりも先生と「相談する」という意味になる。当然「報告」と「相談」とでは意味はまったく異なったわけである。格助詞間の文法的な意味の違いを有する「に」と「と」の置き換えで事柄の内容に関する意味は大きく変わったわけである。

例 15：本を三時までで読んだ。

例 16：本を三時までに読んだ。

「まで」は主に三時の時点に「読書する」行為を終了したという意味を表すが、本を読了したかどうかは少なくとも「まで」からは読み取れない。一方、「までに」は遅くとも三時の時点に本を読了したという意味しか読み取れないのである。従って、「読書する」については共通の意味を有すると言えるかもしれないが、「読了した」と「読書をやめた」とでは意味が質的に異なったわけである。

例 25：先週の日曜日、子供たちと公園に行きました。

例 26：先週の日曜日、子供たちで公園に行きました。

「と」では話し手も一緒に公園に行ったことになり、文頭に「私は」を付け加えることができるが、「で」なら話し手は一緒に公園に行っていないから勿論「私は」を付け加えることはできない。例 25 と例 26 の意味の違いは「私」の同行の有無という意味の違いで表れる。「と」と「で」の置き換えにより事柄の内容の意味が大きく異なったわけである。

例 27：洋服を雑巾とする。

例 28：洋服を雑巾にする。

例 27 は臨時的に洋服を雑巾として使うことだから、少なくとも形の上ではまだ洋服のままになっているであろうし、もしかして引き続き洋服として使う可能性はまだ残っているかもしれないが、例 28 は改造されて洋服の形はなく、すっかり雑巾の形に変わってしまったわけである。従って、例 27 例 28 で言えば、「と」と「に」の置き換えにより、事柄の内容に関する意味は完全に変わってしまったわけである。

例 29：車をそこにとめてください。

例 30：車をそこでとめてください。

例 29 は長時間の駐車も可能な場所を指示しているのに対し、例 30 は一時的に車をとめる場所を指示している。言ってみれば長時間の駐車もできるか、一時的な停車しか許されないかの違いとなる。指示する人が「に」と「で」を間違えたり、あるいは指示を受ける人は格助詞間の意味を間違えて理解したりすると、トラブルを起こす恐れもありうるであろう。例 29 と例 30 は「に」と「で」という格助詞の置き換えだけで、事柄の内容に関する意味は大きく変わってしまうわけである。

上述した通り、格助詞の置き換えで事柄の内容に関する意味は大きく変わり、表現の意味も大きく異なることが明らかである。このような格助詞間の異なった文法的な意味に対する理解は表現を正しく理解するのに大変重要であることは言うまでもない。この違いを

正確に理解できなければ表現の意味を誤解してしまう。日本語においては格助詞は表現の重要な構成要素であり、個々の格助詞の文法的な意味だけではなく、格助詞間の文法的な意味の違いの正確な理解も要求される。格助詞間の文法的な意味の違いを理解して初めて日本語の表現を正確に理解できるようになるのである。しかし、学習者にとっては日本語の格助詞間の意味の微妙な違いに対する理解はなかなか難しいものであり、ややもすれば誤解と誤用を犯しがちなのである。このような誤解と誤用を繰り返したあげく、とうとう日本語は曖昧だと思ってしまうのではないかと考えられる。

5. 人間関係まで影響する格助詞の置き換えについて

以上、格助詞の置き換えで事柄の内容の意味は質的に殆ど変わらない、置き換えにより事柄の内容の意味は質的にかなり変わるといった場合について考察してきた。このような格助詞間の置き換えによる事柄の内容に関する意味の変化よりもっと厄介なのは格助詞間の置き換えは事柄の内容に関する意味の変化にとどまらず、人間関係まで影響する場合である。以下、これについて考察していく。

例 31：木村さんに子供が生まれた。

例 32：木村さんの子供が生まれた。

例 31 の「に」が用いられた場合、新情報として初めて話し手と聞き手との話題にのぼっていることを意味する。一方、例 32 の「の」の場合、話し手と聞き手は既にこの話題について話しあったことがあり、双方にとっては既知の情報を前提にしている。格助詞「に」と「の」の両者の違いは文法的な意味の違いというよりも話し手と聞き手との間に情報の共有の有無の方がより大きな意味を持っていると言えよう。極端に言えば、話題の木村さんと会話の双方の付き合いの度合いが反映され、人間関係の親密度の一端を窺えると言えるかもしれない。

例 17：お茶がいいです。

例 18：お茶でいいです。

人のお宅を訪問した際に、主人に「お飲み物は何にいたしましょうか」と言葉をかけられた時に例 17 例 18 のどちらでも返事することができる。客は例 17 のように「が」で答えれば素直に自分の希望を表明しているのも、特に不快感などを与えることはないであろう。しかし例 18 のように「で」で応じたら、主人に「遠慮してお茶でも何でもよい」か「本当は他の飲み物が良いけど、仕方なくお茶で我慢しよう」との意思が伝わるであろう。特に後者は大変失礼なニュアンスが含められる言い方に聞こえ、主人を不快に感じさせることになる。そうであるならば当然人間関係に悪影響を与えてしまうであろう。従って、例 17 と例 18 では格助詞の置き換えにより表現の意味は変わり話し手の言わんとする気持ちに

大きな差異が見られるわけである。このような場合において、話し手の気持ちの表し方次第で人間関係に影響を与える可能性が高いと考えられる。

例 33：私、あなたのそばにいるだけで幸せだわ。

？例 34：私、あなたのそばにいるだけが幸せだわ。

例 33 で言わんとするのは「あなたのそばにいることさえ許してくれればそれだけで幸せに思うのだが、勿論これ以上のことをしてくれるのなら尚更幸せだよ」という気持ちを込めた表現である。恋をしている人に自分の気持ちを控えめに表した表現になるわけである。このような含蓄のある控え目な表現が使われると、その気持ちに魅かれて恋愛関係は発展していく可能性も大きくなるであろう。一方、例 34 は「そばにいるだけが幸せで、それ以外は何事も幸せになれない」というような意味にも取れ、恋人同士にしては物足りないような表現となり、恋愛関係もうまくいかなくなるであろう。だから、実際に母語話者は例 34 のように使うことは皆無である。

例 35：私にできることがあれば、お手伝いしましょう。

？例 36：私ができることがあれば、お手伝いしましょう。

例 35 で「に」を使うことによって、謙遜とか控え目とかの気持ちを込めた表現になるが、例 36 の「が」はどちらかといえば、遠慮がなく自信過剰のように聞こえてしまうであろう。当然、例 35 と例 36 では全く異なった印象を相手に与えることになる。不快を感じさせたら当然人間関係には多少なりとも悪影響をもたらすから普通は使われないわけである。

例 37：「田中さん、私に日本語を教えてくださいませんか」「私でよければ、喜んで。」

？例 38：「田中さん、私に日本語を教えてくださいませんか」「私がよければ、喜んで。」

例 37 の「で」の方が遠慮がちで、「私みたいな者で我慢していただけるようなら」といった謙遜な気持ちで「教えてあげよう」という意思を表明する方が相手に好感を与えることになるであろう。逆に例 38 の「が」はいかにも「私は十分に教えてやれる」といった過剰な自信があると聞こえて、かえって傲慢といった好ましくない印象を相手に与えてしまうので殆ど使われない所以である。

このように、同じ表現において格助詞の置き換えにより、事柄の内容はそれほど変わらないかもしれないが、話し手が聞き手に与えた感触、印象などがすっかり変わり、双方の人間関係まで影響する可能性は十分考えられる。このような場合において格助詞間の置き換えは可能かもしれないが、人間関係を配慮した格助詞を選択して使わなければならないのが自明の理である。この類の表現の意味の違いに対する理解は大変困難で、誤解と誤用は前述した一と二の場合よりも多発するし、また起こっても容易には気づかない。このような誤解と誤用が多発すると人間関係にも影響する。このような影響が出てもどこに原因があったかわからないまま誤解と誤用を繰り返されるうちに、これを日本語に起因するのだと認識し、結局日本語は曖昧だという結論に帰してしまうのであろう。

6. 終わりに

本稿は、格助詞の置き換えができる表現において置き換えにより表現の意味の変化を三種類に分け、これを手掛かりに中国語を母語とする日本語学習者は何故日本語を曖昧だと思ふのか、その原因について考察した。

一は格助詞を置き換えても事柄の内容に関する意味はそれほど大きく変わらない場合である。この類の表現において格助詞間の文法的な意味の違いを正確に理解できなくても、的確に使い分けることがうまくできなくても、事柄の内容の意味は質的にそれほど大きく変わらないので、コミュニケーションに与える影響はそれ程大きいとは考えられない。学習者はこのような格助詞の使い方の誤解と誤用で多少戸惑いを感じたりするかもしれないが、この程度の戸惑いで日本語は曖昧だと思わせるまでには至らないと思われる。二は格助詞を置き換えたら事柄の内容に関する意味は質的に大きく変わる場合である。格助詞の置き換えによって事柄の内容の意味は大きく変わるため、学習者はこのような意味の変化を正確に理解できなければ、誤解と誤用を犯してしまい、意思の伝達に支障をもたらす。このような表現における格助詞の意味をどう理解すればよいか悩んだり、どの格助詞を使えば正確に伝達できるか迷ったりする。この繰り返しの末に日本語は曖昧だと思ふようになるものと考えられる。三は格助詞一つ置き換えられただけで表現の事柄の内容に関する意味が変わるとどまらず、相手に伝わる気持ちもかなり変わってしまうため人間関係にまで影響する場合である。三の場合、例 38 はもし「同僚の田中先生が良ければご紹介しますが、」のようになれば、「が」の方がかえって適切になる場合もある。置き換えの場面、人間関係などによっては問題なく使えるのだから尚更難しい。このように見てくればわかるように、学習者にとっては日本語の格助詞の使い方は誤解と誤用が生じやすい文法事項なのである。誤解と誤用により知らないうちに相手との人間関係に障害が生じる可能性も高くなるが、学習者は人間関係に悪影響が出てその原因すらわからない場合も多く、どのように理解と使用をすればよいか大変戸惑いを感じるであろう。このようなことが繰り返されれば、日本語が曖昧だという誤った認識をもたらす結果になってしまうのであろうと考えられる。格助詞間の微妙な意味の違いに対する理解不足が日本語が曖昧だと思わせる一因になっているわけである。

本稿は格助詞を中心に日本語は曖昧に思われる原因について考えてきた。置き換えられる格助詞間の微妙なニュアンスへの理解の難しさは学習者に日本語は曖昧だと思わせる一因になっていることが分かる。勿論、日本語が曖昧だと思われる原因は格助詞だけではない。日本語は曖昧だとの誤解を取り除くためには助詞全般にわたって考察して究明していく必要がある。これを今後の課題としたい。

注1：本稿の例文の多くは参考文献や日本語教育関係のウェブサイト上から引用した。詳細は略す。

注2：個々の格助詞の文法的な意味の説明については触れないこととする。

参考文献

北川千里他 平成9年 外国人のための日本語例文・問題シリーズ『助詞』 荒竹出版

田中稔子 2001年 『日本語の文法——教師の疑問に答えます』 近代文藝社

益岡隆志 2008年 『日本語文法セルフ・マスターシリーズ3 格助詞』 くろしお出版

